

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 24 回 第 7.3.1.1 節～第 7.3.2.1 節

2018 年 12 月 15 日

小 田 勝

193 頁「7.3.1.1 む」の続きから。連体形の「む」について、本書では、「假定」（本節用例(11)～(13)）と「未実現」（第 5.7 節）の用法を示しているが、いわゆる「婉曲」については触れていない。学校文法で「婉曲」として扱われているものの実態は、ほとんどこの 2 者であると判断しての処置であるが、「婉曲」と呼びうるような例として次のような例があるから、あげておく（下例が言及している事態そのものは、「假定」でも「未実現」でもない）。

- ・[源氏ガ] などかめでたくとも、ものの始めに（＝明石君トノ縁談ノ最初ニ）、罪に当たりて流されておはしたらむ人（＝流刑ニナッテイラッシャルヨウナ人）をしも思ひかけむ。（源・須磨）

過去の時点から見た現在の推測は「む」で表される。

- ・現にも夢にも我は思はずき<sup>うつつ</sup>古りたる君にここに逢はむとは（万 2601）
- 「7.3.1.2 じ」の 194-195 頁用例(2)～(4)について、次例は係り結びの連体形の例。

- ・滝つ瀬は音にぞたたじ恋すれば枕に落つる涙なりけり（続詞花）

「～じ」の主語が 1 人称であれば必ず打消意志の意を表すと限らないのは、「む」（193 頁最初の◆）の場合と同じ。例えば次例の主語は 1 人称であるが、「じ」の意味は打消推量である。

- ・上も[古今集ノ暗記ニツイテ、全卷ニ渡ッテ試シタ村上帝ノ話ヲ]聞こしめしめでさせ給ふ。「我（＝一条帝）は三卷四卷だにえ果てじ（＝試シ切レナイダロウ）」と仰せらる。（枕 20）

195 頁の用例(9)～(11)について、前著『古典文法詳説』（175 頁、204 頁）では、「じ」に願望の「ばや」が付いた「じ-ばや」と考えていたのを、用例(8)や◆にあげた用例の存在から、本書では「じ+終助詞「はや」と改めた。

「7.3.1.3 むず」の 196 頁の用例(2)は、初刷と第 2 刷で「その事させむとす」に下線が落ちていたので、第 3 刷で「その事させむとす」とした。「むとす」については前回も触れたが、第 7.3.1.1 節の次に、独立した節を立てるべきであった。なお、「む

とす」の推量用法について、多くの古語辞典がただ「推量」と記述するだけであるが、これは『日本国語大辞典 [第2版]』が「すぐに実現しそうな事態の予想・推量」(下線、引用者)と限定を付しているのに従うべきだろう。現代語の「夕日が沈もうとしている」のように。第7.3.1.3節用例(1a)もそうであろう。

196頁用例(4)～(6)について。『伊勢物語』にすでに、「むず」に推定伝聞の「なり」が下接した例がみえる。

- ・秋まつころほひに、ここかしこより、[女ガ] その人 (=男) のもとへいなむずなりとて、口舌 (=口論) いできにけり。(伊勢 96)

次例の「むず」は、「適当・当然・命令」などといわれる用法である。

- ・「迦陵頻といふ鳥は卵の中にて鳴く声も衆鳥に勝れ、梅檀といふいふ樹は二葉より芳かなるは。子共 (=異本「わ子共」。オ前達) もその如くにこそあらんずれ。」とて (保元・金刀比羅本)

197頁「7.3.1.4 やらん」。次例は推量というよりも、婉曲表現として用いられている。

- ・鞠も、難き所を蹴出してのち、やすく思へば、必ず落つと侍るやらん (=トイウコトデス)。(徒然 109)

197頁「7.3.2.1 現在推量」。「らむ」には、「今ごろ…ているだろう」ではなく、「いつも…ているだろう」という推量を表すものがある (佐伯梅友 1951)。

- ・あさもよし紀人ともしも真土山行き来と見らむ紀人ともしも (万 55)
- ・富人の家の子どもの着る身なみ腐し捨つらむ繩綿らはも (万 900)

本年1月1日に、本書第2章のところから開始したこの補遺稿は、1年で第7.3.2.1節(の途中)まで来た。本書は全21章だから、とりあえず1巡するのに、あと2～3年はかかるだろうか。風変わりな連載のような気もするけれど、本書のような広範囲に渡る参照文法書を改善してゆくには意外に適した形式なのではないかとも思っている。また、この補遺稿と歩調を合わせて本書を(批判的に)読み進めてくださる若い方が一人でもいらっしゃるとしたら、私にとってたいへん嬉しいことである。

1年間、おつきあいくださいましてありがとうございます。どなた様も良いお年をお迎えください。

[引用文献追加] 佐伯梅友 1951 「「らむ」について」『国文学』(関西大学) 5